
異世界のドタバタ・プリンセス / ふぁ～すと・こんぷり～と！

E.N.I.G.M.A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界のドタバタ・プリンセス／ふあゝすと・こんぷりゝと！

【Nコード】

N1969Z

【作者名】

E・N・I・G・M・A

【あらすじ】

前回のドタバタ劇から数カ月、早くも主人公・烏丸響の下に新たな事件が発生する。あのユリカとスタルニーが突如として体調を崩し、二人揃って大変な風邪をひいてしまったのだ――。

前作『異世界のドタバタ・プリンセス』の続編。一話完結の読み切りとなっています。他サイトとの重複投稿です。

異世界のドタバタ・プリンセス／ふあゝすと・こんぷりゝと！

1・来襲・もう一人のカデイマ！？

世の中には『流行』という言葉がある。

流行とは誰もが知っているように、ある一定の期間においてその時代の各分野に訪れる一種の大きな潮流の事だ。

実はこの流行、確認こそないが『二十五年で一周する』というジंकスがある。

今のご時世、一昔前の音楽やファッションが注目されているように、かつて一世を風靡したものは、決まった年月をかけて再び訪れるというのである。

え？ なぜいきなりこんな事を言うのかって？

そりやまあ……流行ってワケじゃないけど、俺の人生にまたもおかしな出来事が起きようとしているって事を言いたかったのだ。

そ、そうだよ！ つまり俺の命どころか、世界をも滅ぼしかけたあの桁違いのドタバタ劇が、またもや身の回りで起きようとしているって事！

しかも二十五年どころか、たったの数ヶ月しか経ってないってのに――。

今年の終わりに射程圏内に入りかけた、十一月のとある平日。

校内に立ち並ぶ木々の葉は全て枝を離れ、地面を茶色に染めていた。

昼間ともあって空は快晴。

だがつい三ヶ月ほど前の強い日差しなど、微塵も感じられない。

それどころかむしろ、皮膚に突き刺さる感覚を感じさせていたのは、時折吹き荒ぶ木枯らしである。

その勢いはまるで、全身の毛を逆立たせるほどに強力な季節外れのクーラーと呼ぶに相応しい。

外に居る者は皆、自然が生み出す冷風の餌食になって身体を震わせていたのだった。

「んんゝやつぱり外で食べるご飯は美味しいのうゝ！」

だがここに一人、その寒さをものともせず、思い切り背伸びをする事でそれを歓迎する女がいた。

二千年前から時空を超えてこの時代にやってきた、古代国家ダリス帝国の皇女、カディマ・シンである。

ダリス帝国の現在と、カディマがなぜわざわざ二千年前からやって来たのかについては、何かと長くなってしまうので説明を割愛したいと思う。

とりあえずここで言える事は、カディマは『第一級の天然娘』である事、そしてその身体は生身の人間ではなく、古代の超技術で創られた強力なエネルギー生成装置の『量子融合機関』であるという事だ。

まあとは言え、今は機能を停止しているので普通の人間と変わらないから、今は『紫色の長めの髪の毛に、水色の瞳をした、そんじよそこらには居ない明瞭活発な美少女』とだけ思ってもらって構わない。

この世界に暮らすカディマは、現代日本のとある田舎町に通う、ごく普通の女子高生なのだ。

「お前なあ……何でよりによってこんな寒い日に外で昼飯を食わねばならんだ？　しかも屋上って！」

そしてそんなカディマに抗議している男がこの俺、烏丸響だ。

数ヶ月前、突如として大昔からやって来たカディマの押し掛けに合い、以降幾度も死ぬ目に遭いながら結局自分の家に居候させるハメになった哀れな男である。

更に俺の横には、二人の男女が寒そうに身体を凍えさせている。

ちよつと不良っぽいが成績が良いというギャップが女子に人気の南雲樹なくもいつきと、巨乳だがおっとりした妹キャラでこちらも男子たちから絶大な支持を得ている栗栖詩音くりすしおね。共に生粋の一般ピープルである。

二人とも、外で昼食を食べると言い張るカディマには逆らえず、購買で購入した昼食にも手を伸ばせぬままガタガタと全身を震わせているのだ。

「か、烏丸の言う通りだよな……カディマちゃん、こりやさすがに寒過ぎるぜ……」

「いくら生徒食堂が混んで使えなかったからって……教室とかでも良かったんじゃないでしょうか……」

だが俺たち三人の必死の抗議にも、カディマは全く意に返そうとはしない。

手に持っている巨大な『三合おにぎり（一合＝茶碗約二杯分）』を頬張り、口の周りをご飯粒だらけにしながら説教を口走っているのだ。

「バカタレ！ 若い連中が揃いも揃って何を女々しい事を言っとんじゃ！ 寒ければほれ、わらわみたいに首に『まふら〜』と巻けば良からう！」

そう言ってカディマは、首に巻かれた赤色の毛糸のマフラーをフワリと翻して見せた。

百円ショップで購入した粗末な品の割にはやたらと着こなしが上手いが、しかし彼女の冬着と言えばそのマフラーのみ。

相も変わらずスカートは短いままで、その下に何らかの保温対策がとられているワケではないし、制服の上に上着を着ているワケでもない。

一方の俺たちは全員揃って冬用のセーターに身を包んでいる上、両手を毛糸の手袋に包んでいるのだ。

にも関わらず、こちらの寒さ対策が悪いと責め立てられる始末。

どうもこの女は、寒さに対する感覚が根本的に常人とは異なっ

いるようである。

「ところでユリカさんとスタルニーさん、大丈夫なんでしょうか…」

詩音が心配そうにそう言って、キティちゃんだかの描かれた黄色の手袋をはめた手で、持っていた抹茶ラテをようやく口にする。

「そうだなあ。まさかあの二人が風邪をひくとは」

俺もまた、詩音に相槌を打つ。

今この場にはいないが、本来ならこの場所にユリカとスタルニーという少女たちがいるはずだった。

その二人もまた、それぞれカディマと同じように古代世界で暮らしていた少女たちである。

ユリカはカディマと同じダリス帝国の出身で、当時はカディマの側近みたいな立場にいた。

今は第四種族界と言う、この世界で言う所の『あの世』からこちらに訪れる魂たちを見守る仕事をしている。

だが一方のスタルニーは、そのダリス帝国に滅ぼされたゼノン公国という国の王妃。

祖国が滅亡した後も彼らに対する恨みを抱えたまま、二千年間もミイラとなって眠り続けていたのだ。

そんな感じで因縁染みた者たちが一斉に顔を合わせたワケだから、最初の頃はそれはもう互いに色々あったワケで、水と油を地で行くような相性の悪さだった。

今はもう全てが落ち着いて、俺と同じ学校に仲良く(?)通っているのだが、どういうワケかその二人が昨日から学校を休んでいるのである。

本人たち曰く、「風邪をひいた」という。

「明らかに俺たちより頑丈そうに見えるがな。ホントに大丈夫かな？」

どう考えても普通の風邪では無さそうだという事を予感していた俺は、まさか得体の知れない病気にかかってしまったのではないか

と不安になっていた。

「うむ。それもそうじゃの。そう言えば二人の住んでいる家も見た事無かったし……今日の放課後にでも見舞いに行つてやるとするか」カディマもそれに同意する。

相変わらず非情なまでに吹き荒んでくる木枯らしに身を震わせながら、俺は「自分が先に風邪をひいてしまふんじゃないか」と言う不安に駆られつつ、ユリカたちの見舞いに赴く事にしたのだった。

放課後。

普段ならこの季節は日没も早いのだが、幸いにも今日の授業は五時限目で終わり。

多少傾きかけてはいるものの、まだ太陽の光は燦々と地面に降り注いでいる。

そんな中、俺とカディマは自転車を二人乗りしながら、学校を休んだユリカとスタルニーを見舞うべくそれぞれの家に赴いていた。

まず最初の訪問先はスタルニーの家だ。

とりあえず一言くらい必要だろうと言う事で、彼女にメールでその旨を伝えたのだが、「来なくていい」の一点張り。

もちろんそんな事言われた所でカディマが「はい、わかりました」と納得するはずもないから、結局そのまま向かう事にしたのである。因みにスタルニーの住所は学校の連絡網で事前に調べてある。

「おつかしいなあ……」

だが、最初に連絡網を見たとき、俺はある奇妙な想いに駆られた。スタルニーの住所はちょうど『市立なかよし公園』という、この界限では最も広大な森の生い茂る公園のど真ん中だったのだ。

何かの間違いかと思つて足を向けてはみたものの、やはり行き着いた先はその公園だったのである。

葉が落ち、裸になった森の中を、土を固めて造られた遊歩道が一直線に伸びているだけで、人の住家など当然見つからない。

唯一見つかった建物と言えば公衆トイレくらいであるのだが、これもまた『冬期閉鎖中』との張り紙が張られ、シャッターが降りてしまっている。

「確かにおかしいのう。こんな場所に住んでおるのはリスかカラスくらいじゃぞ」

さすがにこれには天然のカディマもおかしいと感じたようで、懸命にあちこちを見回している。

念のため公園の端から端まで自転車を走らせてみるも、やはりそれらしきものは見つからない。

これはもうダメだろう。

「やっぱり勘違いみたいだな。連絡網が間違ってたみたいだ」
時には諦めも肝心。

もう一度ちゃんと調べ直そう。

そう思い、俺はカディマを連れて公園の外へ戻ろうとハンドルを切り返したのだが。

「あ、あれは何じゃ？」

不意に、後ろで立ち乗りをしていたカディマが、俺の肩を叩いてきた。

「え？ 何？」

一旦自転車を止め、彼女の指差す方向に目を向ける。
すると、木々の間から小さな小屋のようなものがいくつも建っているのが見えた。

小屋と言っても、それは建物と呼べるほどの立派なものではなく、何やら物置のようなかなり粗雑な造りのようでもある。

大きさ的にも、かなり小ぢんまりとしている。

「？ あんな所に何で建物が……？」

「うむ、わらわにもわからんが……もしかするとあそこにスタルニールがあるのかもしれんぞ」

「え？ まさか……！」

さすがにそれは無いだろうと思っていた俺だったが、しかしあそ

ここにはどうも人間の気配がしてならない。

「よし、ヒビキよ！ 物は試しじゃ。行ってみるぞ！」

そう言つて、カディマは軽やかな身のこなしで自転車から飛び降り、一人そこへと走り出した。

この、頭より身体が先に動くという行動パターンには、本当に感心すると言つか呆れるというか。

「あ！ おいカディマ！」

一方の俺も、さっさと行つてしまったカディマを追うように、自ら跨つていた自転車を放り投げた。

そして遊歩道から外れ、枝を振り払いながら鬱蒼と生い茂る木々を掻き分けていく。

すると、程なくして遠くから見えていた建物がはつきりとその姿を現し始めた。

「これは……」

その建物の正体が判別できるようになるにつれ、俺とカディマは言葉を失ってしまった。

遠くから見えていた小さな小屋は、様々な形に組み合わせて作られたダンボールできていたのだ。

一つ一つは小さいものの、およそ数十件は立ち並んでいる。

衣類やら食事の痕跡を見る所、どうやらホームレスか何かの集落らしい。

更に一番手前の小屋に、『ようこそ！ 自由の村へ！』などと書かれている所を見ると、それなりの歴史があるようにも見える。

「こんな場所に集落があつたなんて。夏場は森が深くてわからないな」

突如として街の中に現れた謎の集落。

俺たちは何やら冒険家でもなつたような心持で、小屋に挟まれながら一直線に伸びる通路に足を踏み出した。

見た目こそ物々しい雰囲気集落だったが、一歩踏み込むとそこは『町並み』と呼んでも良いほど整然としていた。

中央に少し広めの通路が設けられていて、その左右にダンボールの塊が等間隔で立ち並んでいたのである。

だが、これだけの規模であればかなりの賑わいを見せていそうな場所も、人気などほとんどなく、物音すら聞こえてこない。

皆出て行ってしまったのだろうか？

そんな事を考えながら更に奥の方へと歩いていくと。

「こるあ！ おめえたず！ 一体何モンだべ！？」

「！ ぎゃあ！」

不意の怒鳴り声に、俺は思わず叫び声を上げてしまった。

俺たちの背後から、訛りが特徴的な男性の声が聞こえてきたのである。

振り向くと、そこには白髪混じりのボサボサな髪の毛と口周りの無精ひげが目立つ一人のオヤジが、ダンボール小屋の中から身を乗り出しこちらを睨んでいた。

恐らく普段着と思われるボロボロの作業着に身を包んでおり、身体つきも痩せ気味であるが、骨太でどこか頑丈そうだ。

間違いなく、ここの住人だろう。

「あ、あの。どちら様？」

「それはこっちの台詞だべ！ 今は皆、ゴミ拾いの仕事さ行つでる時間帯だぞ！ そんな時間に何の用だ！ 何が盗みでも働きに來たんだべか！？」

いくら何でもホームレスのお宅に盗みに入るほど困窮していないなどと思いつつ、オヤジのその余りに迫力ある姿と奇妙な訛りに、俺は反論しようにも言葉の呂律が回らなくなっていた。

「い、いや、あの、その……」

次第にしどろもどろになっていく俺に、オヤジは全身を嘗め回すような視線を向けている。

そして眉をしかめ、腕組みをしながら言った。

「何だあ？ おめえら高校生か？ しかもアベックでこんな時間にこんな場所へ……さてはイチャイチャするつもりだったな！？ そ

「言うつのは家でやれ、家で！」

アベックなどという古臭い言い方をしつつ、ワケのわからない勘違いをしながらこの場から出て行くよう怒るオヤジ。

次から次へと好き勝手を言ってくるオヤジの態度に、とうとうカデイマが怒り出す。

「むうう……さつきから聞いておれば何と失礼なオヤジじゃ！」

「カ、カデイマ!？」

「アベックだろうと余計なお世話じゃ！言われてなくともわらわ達は毎日イチヤイチヤしとるわ！」

何をどう勘違いするとそのような論理が出てくるのかわからないが、しまいには「そうじゃろ、ヒビキ!？」などと言って、ものすごい剣幕で同意を求めてくる始末。

もちろん彼女の言っている事は全て間違いなので、同意などできない。

「う、ウソをつくな！お前、ちよつと黙ってる！」

「え？何で……むぐぐ」

こいつを挟むと、いつも話の糸が絡まってしまふ。

そう思った俺は慌ててカデイマの口を塞いだ。

「うぬぬぬ……黙って聞いてりや生意気な小娘だべ！こつなつたら！」

もしかして若者が嫌いなのだろうか。

カデイマの言う事を真に受けたオヤジは拳を握り締め、全身を激しい怒りで震わせていた。

そしておもむろに作業着のポケットに手をつ込み、中からカナヅチを取り出したのだ。

「ほれ！これ見てみい！」

「！そ、そのカナヅチをどうするつもりだ!？」

ただならぬその姿に、俺は思わず全身を硬直させる。

「ははは！これでも昔は大工で一世を風靡した男だべ！この力ナヅチでなあ、おめえたずの家は解体してやつぞ！」

ものすごく説得力に欠ける、怖くも何ともない怒鳴り文句だったが、とにかく凶器には違いない。

放っておけば何をされるかわからないと感じた俺は、慌てて弁明に回った。

「いや！ 違うつて！ 俺たちはスタルニーって言つ子を探してて、その……」

「何、スタルニー？」

その名前を聞いた途端、オヤジの身体がピタリを止まった。

そしてそれまで強張っていた顔が、見る見るうちに和らいでいくのがわかった。

先ほどの鬼のような表情とは正反対の、かなり気前の良いオジサンと言った印象である。

「何だおめえら、スタルニーちゃんの友達か」

思いがけない展開に、俺は緊張の覚めやらない気持ちのまま言った。

「え？ や、やっぱりここにいるの？」

オヤジが答える。

「もちろんだ！ ほれ、あそこから先が女性エリアになってんだ。あそこにスタルニーちゃんがいるべ！」

彼が指差した先には、ダンボール小屋に囲まれた通路を横切るようにして、一本のロープが張られていた。

そしてその真ん中辺りに『これより女性エリア』と油性マジックで書かれたチラシの裏面が貼りつけられていたのである。

そちらもやはりダンボール小屋が陳列しているスペースだったが、洗濯板の突っ込まれた凸凹の盥^{たらい}や、樹木の枝に干されている衣類にブラウスやストッキングが混じっている所を見ると、やはり女性の住まいを思わせる。

本当にあそこにスタルニーがいるのか？

よりによってなぜこんな場所に？

俺とカディマは、偶然迷い込んだ謎の集落で、更に奥深くへと足

を踏み入れたのだった。

「こ、これがスタルニーの……家？」

集落の一番奥まった場所にポツンと構えられている、ひときわ小さなダンボール小屋。

ぶっちゃけ、ホームセンターで売っているテントの方が作りが良いかもしれない。

無論、それ以前にこんな場所に一介の女子高生が住んでいるという事自体が有り得ないのだが、最寄りの木の枝に干してあるセーラー服やら、年配女性なら恐らく身に付けなさそうな黒いレース調の下着類が干してある所を見る限り、それは信じざるを得ない事実だった。

っていうか、こんなものまで平気で干せるほどここでの生活が板についてしまっているのかと思うと、何気に切なくなってくる。

仮にもスタルニーは、かつて古代国家における最高位権力を握った少女なのだから。

「よ、よし。行くか。お、おーい。スタルニー？」

カデイマと言い、どうしてこいつらは普通のライフスタイルが構築できんだ？ などと思いながら、その小屋の入り口に掛けられた、扉代わりのボロボロの莫蔭^{もくいん}をノックしてみる。

すると。

「……誰？」

若い女性の声が聞こえ、小屋の中からゴソゴソという物音がした。そして莫蔭の端が少しだけ持ち上げられかと思うと、中から端正な顔立ちをした、絶世の美少女が顔を覗かせたのである。

黒く長い髪のに、少し目尻の上がった深い青色の瞳。

間違いなく、スタルニーだった。

だが、本来なら見る者をたちまち惹き入れるほどの瞳は瞼が重々しく、艶が目立つほど滑らかであったはずの髪の色もボサボサ。

日本人離れた端正な顔立ちに映えるあのツンツンな表情も、微塵も見られないのだ。

どうやら体調不良というのは本当のようだ。

「よ、よう……元氣か？ 心配だったから見舞いに來たぞ。身体の調子は大丈夫か」

やっぱり本当に住んでいたんだ。

などと言う本心を必死にひた隠しながら、俺は引きつった笑顔でスタルニーに挨拶してみたのだが。

「！！！！ ちょ、ちよつと！ 何であんたたちがここに！？」

俺たちの姿を見るなり、スタルニーはダルそうにしていた表情を一変させた。

そして顔を真っ赤にしながら、怒髪天を突く勢いでキレ始めたのである。

「あれほど見舞いには来なくてイイって言ったでしょ！ 何考えてるのよ、バカ、バカ、バカああああ！」

ブンブンと両腕を振り回し、全身で怒りを表現するスタルニー。

「わ、悪い！ でも心配だったから……」

予想外の抵抗に、平謝りする俺。

だが、いかなツンデレ王妃と言えど、満身創痍の身体では激しい動きを継続させる事はできなかったようだ。

急激にボルテージを上げたスタルニーは、俺達に説教を始めるや否やフラリと身体を傾かせ、「うゝん……」と呻ったきり、その場に倒れ込んでしまったのである。

「あら！？ ス、スタルニー！ 大丈夫か……って、おわ！？ すごい熱だ！」

慌てて彼女の身体を抱えた俺は、スタルニーの身体が尋常ならぬ熱さを発している事に気づいた。

これは本当に真正銘の風邪だ——そう確信して、彼女の身体をそのままダンボール小屋の中へと連れて行ったのである。

小屋の中は、外見の例に漏れず狭い事この上なかった。

屋根は低くて直立する事すらままならないし、窓などないから暗がりの中を進まねばならない。

当然、足場のない床に置かれている鞆やらちやぶ台やらを蹴飛ばしながら歩かざるを得なかったのである。

「よしと、ここでイイか」

小屋の奥には、恐らく寢床と思われるベッドが置かれていた。

もちろん、きちんとした造りのものではなく、『青森りんご』やら『愛媛みかん』と書かれた箱を積み重ねられて造られた、世界に二つとないリサイクル・ベッドである。

まあ人一人なら何とか寝る事ができそうな場所ではあるが、隙間だらけの空間から全方向的に侵入してくる寒気が、鳥肌を誘って止まない。

こんな危険な場所では、症状が悪化するのを目に見えて明らかだったのである。

「く、屈辱だわ。こんな場所に住んでいる所を知られるなんて……」

これもどこかで拾ってきたと思われる、つぎはぎだらけの『ドテラ』に身を包みながら、スタルニーは苦しげな表情で言った。

本人が白状するには、この時代に来てからというものの、ずっとホームレス生活をしていたのだという。

何せ未成年者の身分である上、保護者もいなければ身元引受人もいない。

強いては国籍すら無いのだから、住居を提供してくれる人間などどこにも居るはずはないワケで、むしろ入国管理局にマークされる危険人物と化してしまったのである。

そんなこんなですっかり流浪の民となったスタルニーだったのだが、ある日、この公園で寢床を張ろうと思った時、偶然この集落に出くわしたのだという。

すでに体力の限界を感じていた彼女は、通報されるのを覚悟で「

住む場所がない」と打ち明けた。

だがスタルニーの予想は良い意味で裏切られた。集落の人々は通報するどころか、彼女を暖かく出迎えてくれたのだ。

以来、この厳しい現代社会を生き抜くためのノウハウを教えられ、スタルニーは心身ともに「見違えるように逞しくなった」という。

ゴミ箱から生活に役立つものを探す方法、ホームレス向けに提供される配給の時間帯、果ては他のグループとの縄張り事情に至るまで。

家なき子として、ありとあらゆる基礎を叩き込まれたというのだ。最初こそ、『落ちぶれても元王妃』たるプライドが邪魔をしてなかなか打ち解ける事ができなかったスタルニーだったが、今やすっかり市民権を得たのだという。

「おかげで、二千年前には想像もしなかった『民衆の気持ち』がわかった気がする。そう言った意味じゃ、ここへ来たのは正解だったかもね」

だが、次第に生活に慣れてきたスタルニーに更なる悲劇が襲う。家のない者たちにとって最大の脅威とも言える、『冬』がやってきたのだ。

俺たちの住む地域は、冬は気温がマイナスを下回る。

詳しくはこれも前回の物語を参考にしてみたいが、王妃だった二千年前、砂漠の隣接するような地域で生活していたスタルニーにとって、寒さ対策の不備は完全な不意打ちだった。

ましてやホームレスは経済事情に厳しく、医療費など払えない。病院にかかるような事態だけは絶対避けねばならないのだ。

にも関わらず、彼女は風邪を引くという致命的な失態を犯した。そして不覚にも、こうして寝込んでしまったというのである。

「恐らくユリカも、私と同じ生活を強いられているはずよ」

「そうだったのか……」

最初は軽い気持ちで話を聞いていた俺たちも、いつの間にかその

壮絶な生活事情に同情せざるを得なくなっていた。

この世界に来てからの数ヶ月間、彼女たちは俺たちの知らない場所でもこんなにも過酷な生活を強いられていたのである。

「ふふ。かつての王妃がこのザマ。笑うなら思いつきり笑うがイイわ」

何やら壮絶な闘いを終えて燃え尽きた覇者のように、スタルニーはクタクタの表情に薄笑いを浮かべている。

本人には悪いが、台詞の割にはダンボール小屋の中で繰り広げられるやり取りかと思うと、とてつもないシニールさだ。

それにしても、こんな困窮した生活環境の目の当たりにした以上、こちらとしても彼女を放置して帰るわけにはいかない。

一体どうしたら良いのだろうか？

そんな事を考えているうち、隣に座っていたカディマが、口を開いた。

「仕方ないのう。ヒビキ、こやつを家に連れ帰らねばならんな」

「……は？」

「……え？」

突然の申し出に、俺とスタルニーは思わず同時に返事を返していた。

「うちに来れば食べ物も薬もある。今はキョーコも出かけている事だし、ちょうどこやつらの分も寝床が用意できるではないか」

言うなり、カディマはすかさず横になっていたスタルニーの身体を起こし、その腕を自らの肩にかけた。

因みにカディマの言う『キョーコ』と言うのは、俺の実姉である烏丸京子（社会人・独身）を指すのだが……それにしても、この主人のような振る舞いは一体何だろう。

この女は、あくまでも俺の家に居候している身であるはずなのに。「え、ちょ……な、何するのよ」

スタルニーの返事も待たず、カディマはおもむろに立ちあがった。そして彼女の腕を引っ張り、上体を無理矢理起こし始めたのである。

る。

「だから、お主を家へ連れて行くんじゃない。ほれ、ヒビキも手伝わんか」

本人が許諾する前に、勝手に行動を起こすカディマ。

「何ですって！？ 必要ないわよ！ 私は別に看病なんかいらなんだから！」

スタルニーは慌てて拒もうとしている。

だが時すでに遅し。

「相変わらずうつさいのう。お主には反対する権利などないんじゃない！」

結局、スタルニーは半ば強制的に小屋から引つ張り出され、そのまま俺の家へと連行されていったのである。

「結局こうなったか……」

それから三時間後。

今や俺の家には、カディマの他に二人の患者が増員されていた。

スタルニーを家に連れてくるという時点でこうなる事は想像できていたが、ユリカまでもが布団の上にその身を横たえている。

ストーブが近い居間に布団を敷き、瀕死の少女たちが苦しんでいるその光景は、もはや緊急外来のようにも見える。

「助かりました……ありがとうございます」

そう言つて、ユリカは発熱で顔を赤く火照らせながら、薄っすらと目を開けた。

スタルニーの言う通り、彼女もまたホームレスの生活を強いられていた。

しかもダンボール小屋に住んでいたスタルニーと違い、彼女の都合はもつと酷くて、何と橋げたの下に新聞紙に包まって眠っていたのである。

これも詳しい話は以前の物語で述べたが、ユリカは元々、スタル

ニーとは正反対の奴隷階級の出身だったから、本来なら野宿の生活など大した苦痛ではなかったらしい。

にも関わらず、彼女もまた同じように風邪をひいてしまった。

冬を越した経験がないというのも原因だが、ユリカが言うには「どうもそれだけではない」らしいのだ。

「未だ原因は不明ですが、まるで自分の身体では無いかのようです」熱を測ると、スタルニーは四十度。

ユリカに至っては、もはや高熱過ぎてERRORの判定が出る始末。

常人なら間違いなく病院送りだ。

しかも二人の体調は、見る見るうちに悪くなっていくように感じられる。

苦しそうな表情を見る限り、睡眠と言うよりはもはや『こん睡状態』と言っても過言ではない。

「おい、お前らホントに大丈夫か？ 救急車呼ぶか？」

いくら特殊な力を備える人間たちとは言え、これはさすがにヤバイだろうと感じ始めた俺は、二人に問いかけてみた。

だが。

「いえ……それには及びません。幸いカディマ皇女から頂いた『しよが湯ソーダ』を飲んで身体も温まってきました。今日を乗り越えれば楽になれるかと……」

そう言つて、ユリカは拒んだ。

スタルニーも「余計な事をするな」と言わんばかりにこちらへ向かつて首を横に振っている。

そう言われた以上、無理に連れて行く事はできないが、本当に大丈夫なのか。

そもそもカディマの作った『しよが湯ソーダ』と言うのは、読んで字のごとくしよが湯を炭酸水で割ったという、とてつもなくぬるく奇怪な飲み物である。

俺も一口飲ませてもらったが、あんなもの風邪が治るところか更

に悪化しかねない。

まさか明日になったら二人とも冷たくなっていたなんて事には……？

などという悶々とした悪い予感を抱きながらも、とりあえず今日はユリカたちの意思を尊重し、家で様子を見る事にしたのだった。

「響…… 烏丸響」

「ちよつと、さつさと起きなさいよ」

「…… んむ？」

その日の深夜。

なぜか寝つきが悪かった俺は、一時間ほどかかってようやく眠りについていた。

だが、それから間もないうちに身体を揺さぶられ、目覚めさせられてしまったのである。

「ん？ あ、あれ？ ユリカとスタルニー？」

暗がりの中、カーテンの間から差し込む月の光に照らされた部屋をキョロキョロと見回す。

するとちょうど目の前に、居間で寝ていたはずのユリカとスタルニーが立っていたのだ。

二人ともイチゴ模様のパジャマを着ていて、こちらを見下ろすようにして顔を覗き込んでいる。

「な、何だよお前ら、いきなり他人の部屋に入ってきて？ 身体は大丈夫なのか？」

顔見知りとは言え、突然の少女たちの来訪に心臓が極度に高鳴った俺は、慌てて飛び起きた。

そして寝ぼけた顔のまま周囲におかしな雑誌などがないか手探りしながら、その行動を誤魔化すかのように体調を確認したのである。

「話は後で。とにかくこちらへ来て下さい」

「そうよ。早く来なさいったら」

一体どうしたと言うのか。

ユリカたちは「お前の事情などどうでも良い」と言わんばかりに、ベッドに座っていた俺の腕を引っ張り始めた。

そして理由も言わずに、居間の方へと連れ出したのである。

一方で、俺は腕を握る彼女たちの体温が、尋常でない熱さを保っている事に気づいた。

未だ完治に至っていないという事を、ひしひしと実感させる温度である。

「あれを見て下さい」

居間に移るなり、ユリカはある方向を指差した。

「？」

彼女の指差す先。

するとそこには、ユリカたちの布団に並んで眠りにつくカディマがいた。

予想はしていたが、「二人の看病をする」などと息巻いておきながら完全な爆睡モードに入っており、鼻ちようちんなど作ってガーガーと気持ち良さそうに眠り込んでいるのである。

「何だ？ 身体が光ってる？」

相変わらずの寝相の悪さに呆れていた時。

俺はカディマの様子に異変が起きている事に気づいた。

ちようど暗がりの居間を照らし出すように、彼女の全身から青白いぼんやりとした光が放たれていたのである。

どこか一部分が光っているという感じではなく、彼女の身体そのものが光を発していたのだ。

「何だよあれ？ 何やってんだあいつ？」

慣れと言うのは本当に怖いもので、この程度の事では俺はもう驚かなかった。

何せ強大な力を持つ特殊な少女三人とほぼ毎日顔を合わせているのだ。

身体から光を放つなど屁とも感じない事件を、二日に一回は経験

している。

それに何度も言うが、カディマは厳密には普通の人間ではない。となれば、どうせまたおかしな『ナント力作用』とか『。。。効果』みたいな、さも大げさな用語の割にはドタバタの域を出ない、ズッコケパターンに決まってる。

……などと気軽に考えていたのだが。

「あの光は、ガンマ線です」

「ガンマ線？」

首を傾げる俺に、今度はスタルニーが口を開く。

「X線や赤外線なんかと同じ、電磁波の一種よ。核爆発とか、太陽活動なんかの時に発生する、強力な放射線の一種でもある」

「ほ、放射線！？」

「ええ。見た所、どうも数日前から放たれていたようなので、私たちの体調不良もあれが原因だったと思われます。あの程度なら、あなたたち細胞構造セル・マトリックスの肉体を持つ生物には影響ありませんが……私とスタルニー王妃のように、エーテル・マトリックス霊体構造の肉体を持つ者には、かなり影響を受けやすい照射量です」

つまりは、俺たちがインフルエンザにかかるのと同じ原理で、ユリカたちは電磁波で風邪をひいたという事なのだろう。

「それって大変って意味だろ？ やばいじゃないか！ ってか、なんでそんなものがカディマの身体から！？」

取り乱す俺に、スタルニーが語気を強める。

「そんな事わからないわよ！ あの子の中にある量子融合機関が原因とは思えない。外界に存在するあらゆる粒子を吸収して、莫大な重力を加える事でエネルギーに変換するのが機関のメカニズム。あのガンマ線は、その時に励起された物質の原子核が放射線崩壊して放出される、副産物のようなものだから」

ユリカに続いて、スタルニーの難解な説明を耳にするうち、ますます混乱の度合いを増していく俺の脳。

だがそんな中でも、一つだけ理解できた事があった。

確かにカディマは以前、自らの能力を暴走させ、この世界をまるごと滅ぼしかねない事態に発展させた。

その時は寸での所で俺とスタルニーが止めに向かい、最終的には成功。

カディマの意識を独立させ、機関そのものを停止させたのである。にも関わらず、今それが動いていると言う事は、機関が再び彼女を制御しようとしている……とでもいうのか。

ユリカの話では、「向こう十年は稼働できない」と言っていたはず。

「いえ。確かに皇女の機関は再稼働が難しい状態だったはずですが、ユリカは首を横に振り、俺の疑問を否定した。

「じゃあどうして!？」

彼女は答えた。

「どうもこれは。皇女の中にもう一つ、全く別の独立した量子融合機関が存在しているとしたか……」

「もう一つって一体どういう……うわっ!？ な、何だ!？」

ユリカの説明に耳を傾けている時、突如としてカディマの身体から眩いばかりの光が発せられた。

それまで暗がりだった部屋は、瞬く間に蛍光灯を数百個光らせたほどの閃光に包まれていた。

突風が起こり、部屋中のあらゆる物を吹き飛ばす。

その勢いは、テレビやソファをもガタガタと揺るがせるほどの強力なものだった。

まるで荒れ狂う太陽を間近で見ているような衝撃。

その力に抗いきれなくなった俺はやがて尻餅をつき、両腕で顔を覆っていた。

「……?」

やがて、三十秒ほどが経過しただろうか。

音が止み、風が止まった事を理解した俺は、恐る恐る顔から腕を離してみた。

少しずつ、少しずつ、外の世界に目を向けてみる。

するとそこは、閃光が走る以前の暗がりの部屋に戻っていた。光を発していたはずのカデイマの姿も元通りになったようで、全くの暗闇に隠れてしまっている。

「ユリカ？ スタルニー？」

明るくなったり暗くなったり。

次はどうなるんだと不安になりながら、俺は手探りしながら二人の名前を静かに呼び続けた。
すると――。

「！！！！ うぷっ！？」

必死に目を慣れさせようとあちこちに視線を向けていた時、俺は突如として何者かによって両側の頬をガッチリと掴まれた。

そして、そのまま何か柔らかいものを顔面に思い切り叩きつけられたのである。

いや、厳密に言えば押し付けられたと言った方が正しいだろうか。ちょうど口の辺りが完全に塞がれ、窒息寸前である。

「ぐむむむ……むむ??」

最初は泥棒か何かの仕業かと思っていた俺だったが、冷静になるにつれ、どうも違うらしいという事を自覚していた。

確かに口は塞がれてはいるが、それは手などではなくもつと柔らかいもので、温かな体温が感じられる。

かなりの勢いで押し付けられているから苦しい事は苦しいのだが、痛みがあるワケでもないし、それどころかどことなしに甘い香りも漂ってきているのだ。

心なしか、髪の毛のようなものに鼻の周りを触られているくすぐったさも。

一体これは何だ？

そんな事を考えているうち、ユリカの声が聞こえてきた。

「烏丸響！ 大丈夫ですか!？」

場の静寂を突き破るような声が聞こえて、カチっというスイッチ

の音がした。

そして天井の蛍光灯が点灯し、真っ暗だった部屋に光が差し込めた。

「!? ぶっ!!!」

明かりが部屋を照らし、視界が戻った時。

俺は自分の置かれていた状況を初めて把握した。

自分が思っていたよりも数倍も大変な状態に見舞われているという事実に気づかされたのである。

なんと俺は、『キス』をしていたのだ。

目の前に、カデイマでもユリカでもスタルニーでもない、見知らぬ少女の顔が視界一杯に広がっていたのだ。

いや、していたなど言っては語弊がある。

無理矢理されていた、と訂正しておこう。

それも唇が触れ合うなどという生易しいレベルではない。

もう何ていうか『ぶちゅ』と言う、吸盤のような凄まじさである。

品が無いと言えばそれまでだが、ここまで思いつき唇を密着させられてしまうとドキドキ感のようなものもキレイさっぱり吹っ飛んで、ただただ慌くってしまう。

「ぶぶぶぶぶぶ!!! ぶはあ!」

何とか自由の利く両手を使い、眼前に広がる顔を引き離す。

「お、お前、カデイマ……じゃない!？」

そこに居た少女の姿がはつきりと認識された時、俺は言いようのない不可思議な感覚を憶えていた。

俺に強制キスをかましてきたその少女は、どことなくカデイマそっくりの姿をしていたのだ。

髪の色は紫色で、目の色も水色。顔立ちもかなり似通っているし、年齢的にもほぼ同じ。

だがよく見ると、長めの髪の毛はツインテールで縛ってあるし、目尻もやや釣り上がっているなど、何となしにボーイッシュな雰囲気

気が漂わせている。

中でも極めつけに異なっていたのは、その服装だ。全身ピンクの、何層にもフリルの重ねられた煌びやかなドレスに、これもピンク色の短いスカートを履いていたのである。

何と言うか、小学生の女の子向けに放送されている、とある戦闘美少女系アニメのキャラクターに見えなくもない。

いや、もうほとんどコスプレと言っても過言ではないのだ。

「あれえ？ もう終わり？ なぁんだ……つまんないの〜」

そんな俺の様子などまるでお構いなしに、驚きと無念さを掛け合わせたような表情を作って少女は落胆している。

そして爆睡を続けるカディマの方に近寄り、彼女の間抜けな寝顔を見下ろしたながら「ダメだこりゃ。お姉ちゃん起きそうにないや」などと言って、再び俺たちの方に身体を向けてきたのだ。

どうもカディマの事を知っているような素振りだが、一体何者だと言うのか。

「だ、誰だお前は！？ って言うか、お姉ちゃんって……」

俺は、腰を抜かしたまま人差し指を向け、その少女に問い質した。少女は、しばらくの間俺の方にその大きな瞳を向けていたが、何やらニヤニヤと不敵な笑みを浮かべながらペロリと舌をなめずり返し、言った。

「ふむふむ。これがお姉ちゃんのカレシの味か。なるほど、あたし好みの味だね」

「カ、カレシ？」

こちらの質問には答えず、まるでキャンディーでも舐めているかのように感触を味わう少女。

しかし、答えこそ聞けなかったものの、俺はすぐに確信した。

少女はカディマを『お姉ちゃん』と呼んでいた。

雰囲気こそ違いが、髪の毛や目の色が似通っている事からも、導き出される答えは一つしかないのである――。

「！ あなた（あんた）は！？」

その時。

俺が指摘するより先に、ユリカとスタルニーが驚きの声を上げた。慌てふためくその様子を見る限り、彼女たちもまた少女の事を知っているようだった。

「ん？ ああ、ユリカじゃない！ 久しぶり……って、ひゃあっ！
？ ゼノンの鬼妃おにひまでいるっ！？」

二人に気づいた少女は嬉しそうにしたり、そうかと思えばビックリしてみたり、悲喜こもごもな態度を示している。

「ちょ、ちよっと待ちなさい！ 誰が鬼妃よ！ 王妃だってば、おう・ひ！」

鬼と呼ばれてカンカンに怒り狂うスタルニーの事は放っておいたとしても、ますますこの少女への確信が深まる。

「ユリカ、もしかしてこいつ……！？」

俺がその確信を伝え切る前に、ユリカがぎこちなく頷いた。

「そうです。あのお方は、我がダリス帝国における第二皇女……つまり、カディマ皇女の双子の妹君にあたる方です」

やはり、である。

「第二皇女……カ、カディマの双子の妹オオオオオオオオ！？」

居間の天井をぶち抜くほどに仰天する俺。

リアクションとしてはありきたりだが、捻りを加える精神的余裕などあるものか。

一方の少女は、うろたえる俺たちを見て何やら楽しくなってきた様子である。

フリルのドレス姿のままで腕組をし、「エッヘン！」と言って大威張りに胸を張り始めたのだ。

「そう！ あたしこそはダリス帝国におけるシン王朝の次女にしてカディマ皇女の実妹。その名もカディル！ 今回は社会勉強のために、直々に遊びに来てやったの！」

そう言っ、カディルという少女は俺にビシィ！ っと人差し指を向けた。

あまりに堂々と胸を張り過ぎたせいか、彼女の短すぎるスカートの下からシルク調の純白色のパンツが見えている。

「力、カデイル！？ 社会勉強だあ！？」

「そのとオオオリ！ キミ、さつきから頭が高いよ！ 控えい、控えーい！」

突如として俺たちの目の前に現れた、新たなる異世界からの来訪者。

全身から漲るその元気一杯のオーラは、やはりカデイマと同じ血筋を思わせて止まない。

いや、それどころかこの少女、もしかするとカデイマをも上回る厄介さを兼ね備えていると言っても過言ではないのだ。

「あゝそれにしてもヒビキ君だっけ？ キミ、見れば見るほど魅力的な唇してるね……」

急に先ほどの余韻が呼び覚まされたのか、カデイルは急にニヤけ始めた。

そして人差し指を咥えながら、もの欲しそうな顔つきでこちらにトロンとした目つきを向けているのだ。

何だかよくわからないが、姉のカデイマと違って、かなり確信犯的なエロさだ。

「え？ あ、いや、その」

「味も形も完璧！ も一回あたしとキスして！」

カデイルはそう言っつて、戸惑う俺に向かって有無を言わず飛びかかってきた。

二メートルはあるであろう間隔を、ひとつ飛び。

ものすごい瞬発力である。

肉食動物並みの素早いジャンピング・プレスを仕掛けられ、俺は逃げる間もなく押し倒された。

「！ こ、こら！ やめ……」

「にへへーいただきます」

んちゅーーーー！

「うぶぶぶ!!!」

そして易々と自分の唇を奪われてしまったのである。

その間、わずか三秒足らず。

カディマと言い、ユリカと言い、なぜ異世界の少女たちは皆こんなにも驚異的な運動神経を発揮するのか。

強烈な吸引力による酸欠状態に悶え苦しみながら俺は強く感じた。これはまたとんでもないヤツが来てしまった。

恐るべきカディマの実妹、カディルの登場。

俺は、かつて身に降りかかった命からがらの大惨事に再び巻き込まれてしまうのではないかと、心底感ぜずにはいらなかったのである――。

招かれざるカディマの実妹・カディルの奇襲攻撃の後。

家の居間は、戦場の爪痕のような痛々しい痕跡が、至る所に残されていた。

俺を助けようとして、ユリカとカディマがカディルを追いかけて回したためである。

ソファは定位置から直角にずれ、カーペットはめくれ放題。

カーテンも引き千切れ、テーブルは引っくり返るといふ、それは惨憺たる光景が広がっていたのである。

因みにこれだけの大騒ぎになっっているにも関わらず、肝心の実姉・カディマは全く起きる素振りを見せなかった。

それどころか涎を垂らしながら爆睡し、ニヤニヤと笑いながら「うゝむにゃむにゃ。それではこれから、わらわとヒビキでk f m vをh%&@じゃ」などと意味不明かつ卑猥な寝言を口走っているのだ。

「あゝ気持ち良かった。苦しゅうない……ってか」

そんなカディマを尻目に、妹であるカディルは、「一仕事終えた」

と言わんばかりの充実ぶりで、思い切り背伸びをし始めている。

彼女の足元には、乱れに乱れた服装で肌も露わのまま地面に横たわるユリカたちと、顔中にキスの痕を作った俺の姿が横たわっていた。

二人はあらゆる手段を講じてカディルを捕まえようと試みたものの、重病の身体でそれを適えるには絶対的に体力が不足していた。

当然、カディルのずば抜けた身体能力の前に太刀打ちできず、それどころか「お仕置き」などと言いがかりをつけられ、逆に追い剥ぎされてしまったのだ。

ユリカは身体中をベタベタと触られ、スタルニーに至っては胸を揉まれ放題。

普段、カディマが詩音に対して仕掛ける攻撃と瓜二つだったのである。

「お、お前ら……大丈夫か？」

文字通り、這う這うの体で床に突っ伏せながらも、俺はユリカたちに無事を確認した。

「大丈夫……と言いたい所ですが、かなりの精神的ダメージを喰らったようです」

「私も障壁とか試してみたけど、全然ダメ。この子を取り巻いている強力な磁場のせいで全部無効化されちゃう。カディマのエネルギーより強力かも……」

共に惨敗と言った感じで、息も絶え絶えに返事を返してくる二人。そんな俺たちに、勝者・カディルは満面の笑みを向けた後、おもむろに床に落ちていたテレビのリモコンを取り上げた。

「お。これが『ちでじ』ってヤツね。どれどれ」

そう言つて、若干おかしいな解釈を口にしつつ、テレビの電源スイッチを押す。

すると映し出されたのは、M H Kの深夜番組であった。

もちろん公共電波のM H Kだけあって、残念ながら『いかがわしい番組』ではない。

いや、そもそも番組と言えるかどうか……何せ「本日の放送は終了しました」というテロップが表示された映像で、とある田舎町の真夏の景色を延々と映しているだけの内容なのである。

青空の下、トラクターがゆっくりと進んでいる田畑やひまわりが咲き乱れる草原、そして深緑の森を飛び回る鳥や虫たちの姿。

長閑と呼ぶにはこれ以上ピッタリの光景はないと断言できるほど、ごくありふれた自然風景が延々と流されるという、それは退屈な映像だったのだ。

「……」

だが、どうしたというのか。

すぐにチャンネルを変えるか電源を消してしまうと思いきや、カデイルはその画面に見入ったまま、微動だにしなくなっていた。

今さっきまで俺たちを翻弄した暴れっぶりはもちろん、楽しいな笑顔一辺倒の表情もどこへやら。

ただひたすらテレビの前に身体を向けたまま、至って真面目な表情を作っていたのである。

「カデイル？」

異変に気づいた俺は、恐る恐る声をかけてみた。

「……いいなあ。ここも皆楽しそうに暮らしてる……」

「え？」

ポツリと何かを口にしたまではわかったのだが、とても小さな声だったため、その内容を理解するまでには至らなかった。

俺はつい彼女に言葉の内容を聞き返してしまった。

「あ……お、おい！ ちょっと！ どこへ行く気だ!？」

だが、カデイルが答える事はなかった。

彼女は、こちらの存在を忘れているかのようにリモコンを放り投げ、急に窓の方へと歩き出した。

そして窓を開け放ち、冷たい夜風に迎えられながらベランダの外へと出て行ったのである。

直後、突如としてカデイルの身体の周辺に、光を放つ小さな粒が

いくつか現れた。

全部で五つほどある光の粒は、彼女の周りをちょうど上下に螺旋を描くように周回していて、徐々にその速度を速めていく。

同時に、どこからともなく夜風とはまた違った風の流れが形成され始めていて、それが上昇気流を生み出しながら彼女の服や髪の毛をふんわりと逆立たせていた。

「え！？ と、飛んだ！？」

カディルを呼び止めようとしていた俺は、そのまま言葉を呑んだ。光の粒が取り巻く彼女の身体が、重力を遮断するかのようにフワリと浮き上がった。

そこから見る見るうちに地面を離れていき、やがて完全に宙を舞ったのである。

月夜の空に照らされながら、全身を淡い光に包まれるその幻想的な姿は、まるで天使を見ているかのようなだった。

「！ いけない！ 早く追わなければ！」

見る見る遠ざかっていくカディルに見とれるうち、不意に背後からユリカの声が聞こえてきた。

何事かと思つて振り向くと、ちょうど彼女は立ち上がり、今まさにパジャマ姿のまま玄関へと走って行こうとしていたのである。

「おいユリカ！ 待てよ！ お前、その格好で追う気か！？」

あんな格好で夜中に走り回ったら警察沙汰だと感じた俺は、すぐさま呼び止めようとした。

「う……」

だが、その不安は杞憂に終わった。

自分の置かれている状況に気づく前に、ユリカは足をふらつかせ、へたれ込むようにしてその場に倒れてしまったのである。

スタルニーもいつの間にか倒れている所を見ると、どうやら体調不良が悪化したらしい。

それはそうだ。四十度以上もの熱を出していた状態で追い回された拳句、カディルによって衣服を追ひ剥ぎされ、全身を愛撫されて

しまったのだから。

そもそも今まで悪化しない方がおかしかったくらいである。

俺はカデイルの事などそっこのけで布団を敷き直し、ユリカとスタルニーを引きずって行った。

相も変わらず爆睡状態を維持し続けるカデイマに、怨恨と憤慨の視線を向けながら――。

「おいこら、いい加減起きろって！」

カデイルが飛び去った後、俺は微動だにせず眠り続けるカデイマの身体を揺さぶっていた。

先のドタバタでは何の被害も受けていないはずなのに、なぜかこの時のカデイマも寝巻が乱れ放題だった。

赤と白のチェック柄のパジャマは胸元全開だし、下は骨盤の位置まで下がっていたりするなど、寸での所で要所が見え隠れしているのである。

これまで幾度となく感じた事だが、これが古代の超大国における最高権力者とは到底思えない失態だ。

「まったく、全然起きねえ。一体どうなってるんだ？」

「げばげほ……烏丸響。恐らく皇女は目を覚ましません」

一向に起きないカデイマに四苦八苦する俺に、布団の中で包まっていたユリカが話しかけてきた。

咳混じりで、先ほどよりも更に弱弱しい声になっている。

「起きない？ それってどういう意味だ？」

問い返す俺に、今度は隣に寝ていたスタルニーが鼻を垂らしながら答える。

「目を覚ませない、と言った方が正しいわ。カデイマの体内にある量子融合機関は確かに停止状態だけど、生体活動に必要なエネルギーだけは僅かに生成していたの。でもカデイルが転生する時、その残存エネルギーを流用してしまったのよ。動力源が枯渇したカデイ

マは活動維持が難しくなつて、一時的な冬眠状態に入ってしまったってワケ……は、はくしょん！」

道理で目を覚まさないワケである。

その割には終始ニヤけているし、いつもと何ら変わらない寝顔なのだが、普段ならこれだけしつこく声をかければちゃんと起きる。にも関わらず、こちらの呼びかけに何の反応すら見せない所を見ると、やはり二人の言っている事は概ね正しいようだ。

「カディルってのは何者なんだよ？ カディマの妹とか言ってたけど……あいつも同じ力持ってるのか？」

事情を知らない人たちのために再度説明しておくが、カディマを含めダリスの王族には、国家全体を賄う莫大なエネルギーを生み出す役割を与えられた者たちがいて、それが量子融合機関と呼ばれている所以なのだ。

だが反面、強大な力を持つ彼らは精神的に脆く、ちょっとした心の傷で即座に情緒不安定になる。

かつてカディマがこの世界を訪れた時、彼女は精神が不安定化し、結果として機関が暴走するという事態を引き起こした。

その時はブラックホールと同じ原理の『空間を歪曲させるほどの高エネルギー体』が形成され、危うくこの世界ごと呑み込まれそうになったのである。

そんな生死の危機を遙かに超越した事件を体験したものだから、今回もそれに似通った事態に発展するんじゃないかと否応なしに不安になるのは、当然の成り行きだった。

「まさか場合によっちゃあ、またこの前みたいな事に……なんて事はないよな？」

聞きたくない答えが返ってこないように必死に祈りながら、俺はチラリとユリカたちの方を見て言った。

だが。

「……残念ながら、『あり得ない』という保証はありませんね」

ユリカも、俺がそう思っている事を見抜いていたのだろう。

彼女もまた俺の視線に目を合わせながら、虚ろな目つきで淡々と答えてきたのだ。

「カディル姫も量子融合機関を体内に持っています。しかも厄介な事に彼女の能力はカディマ皇女よりも高く、自我とのシンクロ率も数段上。精神的に未熟な姫がもし心の脆さを露呈させれば……前回よりも更に大規模な被害が生じる可能性があります」

やはり、である。

要はさつさとあの『お転婆キス魔』を捕まえなければ、世界は再び崩壊の危機に直面するという事なのだ。

しかし、以前までの俺ならそれを聞いた途端「大変だ！ 早く探さないと！」なんて叫んで玄関に飛び出していたのだろうが、今回はばかりはもはや慌てる体力さえ無くなっていた。

ただただ漠然とした虚無感と無力感に苛まれ、如何ともし難い苛立ちに脳内を支配されていたのである。

いや……ぶつちやけ情けない話だが、「またあのような命の危険を冒さねばならないのか」

という恐怖心が根底にあったと言っても過言ではない。

「まったく次から次へと。どうしてお前らは……ホントにもう！」
毎度の事ながら思うが、こいつらが持ち込むドタバタ劇はケタが違い過ぎる。

何せ『一步間違えりやたちまち人類滅亡』なんてハプニングが、まるでデパートのバーゲンセールのように日常茶飯事的に起きるのである。

俺のこの生活環境を知っている読者連中にとっては、「毎日美少女に囲まれて羨ましい」なんて呑気に思ってるヤツもいるかもしれないが、常に死よりも危険な出来事と隣り合わせである事を忘れてもらっては困る。

でもそれをまともに捉えていると気力も体力も持たないから、終始笑いや突っ込みを入れて誤魔化そうとしているだけなんだって！
とは言え、俺がいくら乗り気がしない所で事態は何事もなかった

ように進み続けるのは、時間の法則・宇宙の真理。

ユリカは逃げ腰状態の俺の尻を蹴飛ばすような、トドメの『煽り』をかましてきたのだ。

「恐らく社会勉強と言うのは口実に過ぎません。皇女の残存エネルギーを流用した事実と言い、この世界に転生してきたのは明らかに別の目的があつたからです。それも切羽詰まつた理由が」

「理由？ それは一体どんな理由なんだよ？」

理由を尋ねる俺に、ユリカは一瞬押し黙った後、やや視線を落としながら重々しく口を開いた。

「これは極秘事項ですが……実は姫は……」

ユリカの話聞くにつれ、その場にいた俺とスタルニーの顔色が神妙な面持ちへと変わっていく。

「そんな。まさかあの子が……！？」

「ユリカ、それって本当なのか！？」

「はい。間違いありません」

それまで俺の全身を支配していた気だるさは、ユリカの話聞き終わったと同時に、どこかへ吹っ飛んでしまっていた。

「冗談じゃないぞ！ 早く行かないと！」

こんな所でボーっとしている場合じゃない。

そう思った俺は、気がつくと防寒着を着こんで玄関へと飛び出した。

爆睡を続けるカディマを起こす事など、まるで忘却の彼方へ置き去りにしたまま。

2・色欲系戦闘マシン・カディル！？

ユリカが言うには、カディルは確かにダリスの王族であり量子融合機関の持ち主なのだが、その中でも「更に特殊な部類」に入ると言う。

そのため、カディマ以上にがんじがらめの生活を余儀なくされており、元々の自由奔放な性格も重なって、毎日のように脱走を繰り返していたそうなのだ。

恐らく今回こちらの世界に来たのも、そういった抑圧から抜け出すための逃避だったに違いない——それがユリカの推測であるのだが、その『特殊な部類』こそが、本当にやばい部類なのである。

「姫の居場所が近い……センサーの座標を見る限り、もうすぐです！」

極度の体調不良を抱えるユリカとスタルニーを引き連れ、カディルの搜索を始めた俺たち。

今回ばかりは心強い味方をつけているから、どこへ行こうとすぐに見つかるはずだ。

そう期待していた俺だったが、その予感はずくも的中した。

ユリカの持つ特別仕様のスマートフォン『アイフォンドロイド』に搭載された量子検知GPSとスタルニーの霊体使役によって、カディルは昨日俺たちが訪れた『市立なかよし公園』に居るという位置情報を突きとめたからである。

なぜそんな場所にいいのかわからないが、とにかく今回はトントンの拍子で事が進んでいる。

早めに手を打てば、大きな被害を出さずに済むはずだ。

などと言う期待に胸を躍らせながら、俺はかなり勝手気ままな期待を抱き始めていたのだが。

「げ！？ なんじゃありや！？」

ところがどうこい。真夜中の公園に辿り着いた俺たちが見たもの。それはこちらの期待を嘲笑うかのように繰り広げられる、お転婆姫の『無差別攻撃』であった。

夕方、俺がカディマと訪れたホームレスの集落。

その集落から少し離れた所にカディルと思しき少女が宙を舞っていて、眼下の小屋に向けてまるでレーザー光線のような青白い光を乱射していたのだ。

直撃を受けた小屋は、何の抵抗もできぬまま一瞬で燃え尽きていく。

あの威力から見て、恐らく鉄筋コンクリート製の建物でも破壊するだろう。

蹴飛ばしただけでも崩れ落ちてしまうようなダンボール製の小屋など、言わずもがなである。

「や、やめでくれえ！ 何の恨みがあつてオラたちの家さ燃やしちまうんだあああ！」

阿鼻叫喚の嵐の中、逃げ惑う人々の中から一人の人物が俺たちの所へ転がり込んできた。

昨日ここに訪れた俺たちを出迎えてくれた、あのオヤジである。

「ゲンさん！？ 大丈夫なの！？」

その姿を見たスタルニーが、慌てて駆け寄る。

「おお！ スタルニーちゃん！ オラや皆は大丈夫だけど……一体何なんだべこれ！？ オラたちの住処が……皆の村が消えちまうだあ！」

ゲンさんと言う名前らしいオヤジは、そう言つて涙ながらに助けを求めてくる。

いかにダンボールの家とは言え、自分の家を無残に破壊される様を目の当たりすれば、悲しまない者などいない。

そう思うと、この住人でない俺もまたやりきれない想いに駆られてしまうのだった。

「遅かったか……あの光は、『ガンマ線バースト』です」

燃え盛る集落を見つめながら、ユリカがそう言つて唇を噛む。

「ガンマ線バースト？」

「量子融合機関内の原子に急激な圧力が加わると爆縮効果という作用が生じるのですが、その時に生み出されるエネルギーは機関内に収まりきらないほど莫大なため、大量の電磁波を外部に放出します。それがあのガンマ線の一斉放射、ガンマ線バーストです。この地球上で繰り返されてきた生物大量絶滅も、超新星爆発によるガンマ線

バーストが一要因と言われている。それほど強力な破壊力を持つ物理現象なのです」

「じゃあ、やっぱりあの光を放っているのはカデイルか!？」

「間違いありません。しかもあの放出は、一種の攻撃手段として意図的に制御されているように見える……恐るべき統制能力です。早く止めなければ!」

言うなり、ユリカはスタルニーに住人の救助を求め、そのまま燃え盛る集落の中へと単身飛び込んで行った。

「あ! おい! 待てよ、ユリカ!」

ここまで来たら、怖いだのへつたくれだの言っていられない。

燃え盛る炎の中、俺もまた無我夢中でユリカの後を追って行ったのだった。

「いた! カデイルだ!」

爆心地に踏み込んでから数秒と経たないうち、俺は四方を炎に囲まれるというアクション映画のラストシーンのような場所に佇むカデイルを発見した。

燃え塵と化し、地面に散り散りとなったダンボールの残骸の上にふわふわと浮遊するカデイルには、俺やユリカたちと戯れた時のようなおちゃらけた表情は微塵も見られなかった。

服装こそ、場にそぐわないミニスカドレスのままだが、その顔は怒りに満ちており、髪の毛も逆立っている。

姉妹という差はあるが、その身体から放たれる神々しさとおぞましさが混じり合う殺気は、かつてカデイマが暴走した時と全く同じ様相を呈していた。

「許さない……この世界にも『友達^{すみか}の住処』を奪う連中がいたなんて」

「? カデイル?」

先ほどまでの女子高生のような軽々しい口調とは正反対のドスの利いた声色で、頭に直接声を響かせてくるカデイル。

どうも何者かに対して怒りを抱いている様子である。

彼女の全身から滲み出ている青白い光が、その怒りに更なる仰々しさを演出していた。

「あいつ何か怒ってるみたいだけど……どうしたって言うんだ？」
次第に勢いを増していく殺気に戦々恐々としながら、俺はユリカに理由を尋ねた。

本来気丈な性格であるはずのユリカもまた、かなり強張った表情をしている。

「どうやら、ここにいたホームレスの住人に対して強い怒りを抱いているようです」

「怒り！？ なぜ……」

「私やスタルニー王妃、カディマ皇女もそうですが、南緯度に暮らしていた者にとって『冬』という季節はあまり体験した事がありません。恐らく姫は、この森が枯れているのは自然現象とは気づく事ができず、あのホームレスの人たちが環境破壊をしたせいだと思い込んでいるでしょう。姫は特に森の動物たちとの戯れが好きでしたので、余計に許せなかったのだと思われます」

「ええ！？ 何だそれ！」

何と言う迷惑な誤解だろう。

単なる勘違いだと思えば可愛いものだが、あの少女に限ってはそれでは済まされない。

一度精神のバランスが崩れれば、世界を不毛の大地に変えるほどの力を発揮するのだから――。

「許さない、許さない、許さなあああああああいー！」

悲痛と怒りの入り乱れた叫び声が、森中に響き渡った。

耳にキンキンと響く声と共に、カディルの全身から滲み出ている光が再び一斉に放たれる。

彼女が、暴走を始めたのだ。

空気の振動によって、辛うじて残されていた小屋は根こそぎ地面から剥ぎ取られていき、その外側に生えていた木々をも巻き込もうとしていた。

一帯はもはや公園としての限界を留めてはおらず、「環境破壊をしているのはどっちだ！」と言いたくなるほどの惨状である。

「聞く耳持たずか……仕方ない。ならば止めるまで！」

これ以上、口で言っても無駄だと判断したのだろう。

ユリカは軽いため息をついた後、意を決したように白銀色の『剣』を召喚した。

そしてそれを両手で握り締めながら、カデイルの方へと向かって飛び出したのである。

「姫！　しばしのご無礼、お許しを！」

勇ましく立ち向かうユリカに対し、カデイルは鼻でせせら笑った。「ふんっ！　ユリカ、キミまで悪人どもの肩を持つというのね！」

そう言って彼女もまた、「望むところ」と言わんばかりに迎え撃ったのである。

やがて二人の距離が無くなり、直後に激しい衝突が起こった。

ズガアン！　という鉄の塊をぶつけ合ったような衝撃音が聞こえたかと思うと、爆発とも言うべき巨大な火花が発生した。

やっぱりこうなるのか！

二人の少女が繰り広げる壮絶なバトルを前に、すでに手も足も出なかった俺は、仕方なく地面に突っ伏した。

ガキン！　バキン！　ギャリギャリギャリ！

二人の争いは、かつてスタル二とユリカがやり合った時よりも更に上を行く凄まじさだった。

弾丸のような速さで衝突し、そうかと思えば互いに間合いを維持しつつ、また衝突する。

ユリカの剣とカデイルの拳とがぶつかり合うたび、凄まじい衝撃波が生じ、半径十メートル以内のものをことごとく吹っ飛ばしていく。

一見すると、そんじょそこらのアイドルなど足元にも及ばないほどの美少女たちが繰り広げる壮絶なやり取りは、『市立なかよし公園』というネーミングには到底不釣り合いの、熾烈な死闘だった。

「す、すげえ。あの強さ……やっぱりあいつ、兵器だったんだ」
当初は互角と思えた戦力の均衡。

しかし時間が経つにつれて、そのバランスは次第に崩れていた。
豊富な知識を備え、また武人としての心得もあるユリカが、カデイルにじわじわと押されていたのである。

以前はスタルニーを破り、カデイマすら操った稀代のジョーカー少女も、体力的なハンデを背負っていた事が災いして、戦闘を持続させられずにいるようである。

だがそれよりも何よりも、もう一つ彼女にとって絶対的に不利な条件があった。

それはカデイルが、王族の中でも『破壊者』としての素質を備えた者であるという事である。

そう。先ほど触れた『特殊な部類』というのは、カデイルが敵と闘うために育てられた戦士である、という意味なのだ。

ここに来る前、ユリカが明かしてくれた話では、カデイルは『アポカリプス戦
略殲滅型機関』という、特殊な戦闘訓練を施された量子融合機関なの
のだと言う。

軍事転用もできるが、基本的には生成したエネルギーを分け与える役目を担っていた姉・カデイマと違い、完全な破壊活動を可能とした戦闘タイプの機関として育てられたらしいのだ。

そのため幼少期から普通の王族とは違った生活を強いられていて、カデイマよりも更に窮屈な生活を余儀なくされていたらしい。

四六時中を戦いに費やす人生。それは確かに戦闘能力を向上させてくれたものの、逆に白黒はつきりさせないと気が済まない、短絡的かつ勧善懲悪的な性格を作り出してしまったのだという。

その証拠に、さっきまでのいやらしいくらい馴れ馴れしかった様子はどこへやら。

自分の目的に同意しないと判断するや否や、敵味方問わずあしき
て有無を言わず攻撃を加えてしまうのだ。

だからこそ早く止めなければ、この世界に多大な影響を及ぼして

しまつのは必至。

それが、ユリカがカデイルの行動を止めようとした最もたる理由なのである。

「ほらほら、どうしたの！？ 天下の一級統監も、あたしの力の前では手も足も出ないようね！」

だが恐るべき破壊の女神たるカデイルを止める事は、さしものユリカでも困難を極めていた。

薄笑いを浮かべ余裕綽々のカデイルを前に、もはや防戦一方だったからだ。

「何と言う戦闘能力……これが『創造主の系譜を受け継ぐ者』の実力か」

言葉を詰まらせ、一步一步じりじりと後ずさりしながらもユリカは応戦を続ける。

かつてはあれだけの権勢を誇った彼女も、もう後がない。

スタルニーの加勢を期待したい所だが、彼女はすでに離れた場所で救出活動に回っている。

という事は残されたのは……？

どうする？ どうするよ、俺！

「あーもう！ やっぱりこうなるのかよ！ うおおおおおおお
お！」

どうするも何も、こうするしかなかった。

俺は地面に突っ伏していた体勢から立ちあがり、後先考えないまま、やみくもに突っ走っていた。

そして躊躇する事なく、ちょうど背を向けていたカデイルに向かって飛びついたのである。

「あ！ こらキミ、何するの！」

不意に背後を取られたカデイルが、苛立ちの声を上げる。

「うつさい、このお転婆娘！ いい加減にしろ！」

俺はもう何も考えず、ただただ覆いかぶさるようにしてカデイルの身体を引っ張った。

そして、ユリカとの距離を離そうと踏ん張り続けたのである。

「うむむむ！ お姉ちゃんのカレシの分際で、出しゃばるんじゃないー！」

突然の割り込みに怒ったカディルは片腕を振り上げ、身体を抑えていた俺をいとも易々と吹っ飛ばした。

そしてすかさず方向転換をし、地面に突っ伏せる俺の方に身体を向けて光を発し始めたのである。

「！ いけない、ガンマ線バーストだ！ 烏丸響、伏せて下さい！」
少し離れた場所から、ユリカの警告を発する声が聞こえてきた。
だが、戦闘経験などない俺にとって、そんな事を言われたからとすぐに反応できるような訓練は受けていない。

「あははは！ もう遅い！ キミも真っ黒焦げにしてあげるからねー！」

そしてカディルの笑い声が聞こえた、次の瞬間。

彼女の身体から放たれていた光が一気に増したかと思うと、目の前に閃光が走った。

俺に向かってあの恐ろしい光線が放たれたのである。

「！！！！！！！！！」

もうダメだ。

逃げるより先に死を覚悟した俺は、その場に立ち尽くしたまま目を瞑ったのだが――。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……あれ？」

どうしたと言うのか。

てっきり全身を地獄の業火に焼かれると思っていた俺は、首を傾げてしまった。

熱さや痛みはもちろん、何らかの衝撃や違和感も感じられなかつ

たのである。

もしかしてもう死んでしまったのだろうか？
不思議に思っ、て、ゆっくりと顔を覆っていた腕を解いてみる。
すると。

「！！！！ ぎゃあ！ カデイル！ お、お前、何て格好してんだあ
ああああ！」

俺は再び顔を覆った。

危険を感じたからではない。

それまで目の前に浮いていたカデイルが、地面の上に尻餅をついて、へたり込んでいたのである。

それも素っ裸の状態で！

「あ、あれ？ なんで？ 力が入らない？」

ユリカとの壮絶な死闘が、意外な結末を迎えた後。

突然の収拾劇に、カデイルは自分の格好などそっちのけでただただ混乱していた。

何度も首を傾げながら「とあ！ あちよ！」と言って、おかしな拳法の動きで攻撃を試しているのだ。

だが、いくら試してみた所で彼女の声が深夜の森に虚しく響くだけ。

あの恐ろしい光線はおろか、宙を浮く事さえもままならなかった。
どうやら、さっきまで発揮していた力が、すっかり無くなつてしまったようである。

「も、もうホントに……何ですぐお前らは裸になるんだよ！」

今までの恐怖心などどこへやら。
俺はカデイルの美し過ぎる裸体から目を逸らしつつ、身に着けていた防寒着を慌てて羽織らせてやった。

生死をかけた死闘を繰り広げたかと思うと、急に裸になってみた
り。

対峙すればいいのか、フォローしてやったら良いのかさっぱりわからない女である。

「どうやらエネルギー切れのようですね」

ユリカが激しい戦闘で付着した土をほろいながら、そう言って近づいてきた。

カデイルとの戦いで負った傷を身体のおちこちに作り、衣服も所々破れてしまっている。

「エネルギー切れ？」

「長時間の戦闘で、姫の機関内にある原子燃料が枯渴したのです。ただでさえカディマ皇女のエネルギーを流用しなければならなかった状態でこれだけの出力開放を続けたのですから……必然的結末かと」

「うつそ！？ そんなのアリ！？」

ユリカの説明に納得できない様子で、カデイルは要所を隠そうともせず呆氣にとられている。

エネルギーが切れると性格も大人しくなるらしく、さっきまでの激昂した様子はどこへやら。

すっかり元のあどけない少女に戻ってしまったのだ。

こうして、異世界の破壊者と武人との戦いは意外な形で決したのだった。

「姫、今回はおいたが過ぎましたね。もうこれ以上好き勝手にはできませんよ」

ユリカがそう言つて、呆れ半分怒り半分の口調でカデイルの前に立ちはだかる。

「むむむ……せつかく森の侵略者たちにお仕置きをしてやろうと思つたのに！」

カデイルはカデイルで、未だこの住人たちが犯人だと誤解しつつ、眉間にしわを寄せながら膨れっ面を作っている。

軽々しく「お仕置き」などと言っているが、それで家そのものを完全に破壊してしまうのだから、ここの住人たちには本当に心中お

察しますとしか言いようがない。

「ま、まあ落ちつけよ。っつーかお前、こつちの世界に一体何をしに来たんだ？」

悔しがりながらも、落ち着きを取り戻したカディルに、俺はこちらの世界を訪れた理由を尋ねてみた。

ユリカの推測では、カディルはその苛酷な運命を与えられた存在ゆえ、その重圧に耐えきれずこちらの世界に逃げ出して来たのではないかという。

テレビの自然風景に感化され、すぐに家から飛び出した様子を見るからに、抑圧され続けた気持ちが彼女を突き動かしたとも考えられる。

それを思うと、身勝手な行動の結果とは言えこの生意気な妹にも同情の余地があるという事実を、俺は否が応でも認めざるを得なかった。

……かに思えたのだが。

「『すトラいき』だよ」

「は？」

「だから、『すトラいき』だって。家臣たちが約束を守ってくれないから、怒ってこつちに家出てきたの！」

そう言っただカディルは叫びながら、子どもっぽく頬を膨らませている。

何かしらの原因があつてこちらに来たのは間違いないらしい。

だが、ユリカの予測とも少し事情が違う様子である。

そもそもストライキなどと、少なくともこんなお転婆少女が使う言葉ではない。

俺とユリカは顔を見合わせ、互いに首を傾げていた。

「カディル。お前、ストライキの意味わかってんのか？ 食い物のステーキなんかと勘違いしてるんじゃないだろうな？」

「んな事わかってるよ！ あたしは知識だけは人一倍あるつもり！ バカにするなど言わんばかりに怒りまくるカディル。」

そしてすかさず、「ほら見てよ、これ！」と言って、一枚の紙を渡して来たのだ。

A4サイズのその紙は、何かの広告のようだった。

爽やかな海辺をバックに、お洒落な格好をした五人の美少年たちが立っていて、甘い笑顔を向けている。

何の事はない。彼らは今テレビや雑誌で引つ張りだこの、『IG ARASHI（五十嵐）』とか言う小学生の男の子たちで結成されるショタコン向けダンス・ユニットである。

その紙は、彼らのツアーが始まるという、ライブ広告だったのだ。「？　これがどうかしたのか？」

なぜ異世界からやって来たカデイルがこんなものを持っているのか。

不思議に思った俺は、理由を訊ねてみた。

「どうするも何も、私は月に一度、学習した戦法を試す試験を受けなければならぬの。それで、今度それに合格したらIG、ARASHIのライブに行っても良いって家臣たちと約束してたのよ。だからあたしは頑張って勉強して、満点まで取ったのに……なのにあいつらときたら、『どうせ満点など取れるはずがないと思ってたから、チケットを予約してませんでした』って言い捨てたのよ！？」

「……そ、それで？」

「おかげで慌てて自分でチケット買いに行った頃には……全部売り切れ！　うえゝん」

切々と事情を説明するうち、感極まったカデイルはその場にへたり込んで泣き出してしまった。

「おま……そのどこがストライキだ！……」

当然ながら、俺は突っ込みを入れてしまった。

公園を破壊し、住人の住処まで奪っておきながら、聞かされたのは桁違いに野暮な理由。

何が「知識だけは人一倍」だ。

労働争議以前にただの『駄々こね』ではないか。

こんな自己中の事情が一連のドタバタ劇の原因とは、家を破壊されたホームレスの人たちは何と気の毒な事だろう。

「まったく……で？ こいつをどうするんだよ、ユリカ？」

一応、事態は收拾しようだが、カディルは王族の上、断りもなしに逃げ出して来た身分である。

いつまでもここに置いておくワケにはいかない。

俺に処遇を訊ねられたユリカは困った顔をしていたが、腕組をして考えた後、言った。

「とりあえずは本国に連絡して引き取りに来てもらいましょう。恐らく彼らも必死になって探し回っているはずですし。もちろんここにあった集落も速やかに修復させます。カディマ皇女については……姫のエネルギー流用が途絶えたようですので、そのうち目を覚ますかと」

「そうか……」

カディルの処遇に被害者への補償と言う事で、ひとまずは全てが鞘に収まったという所だろう。

ケガ人も出なかったから万事解決……と思っていた俺だったが、どうもしっくりこない。

心の中で、何かが^{つか}痞えているような気がしてならなかったのだ。

「ひぐ……えつく……」

もちろんそれは、今もこうして嗚咽を続けるお転婆姫の事だ。

最初こそただの我がままだと思っていたが冷静になって考えてみると、いくら今回の事件が自業自得だったとは言え、カディルが王族ゆえの窮屈な生活を強いられていた事は事実。

一步も外に出られず、食事と衣服が与えられるだけの牢獄と変わらない生活——過去のカディマとの一件で、それを嫌というほど聞かされていたから、つい同情の目で見えてしまうのである。

本当にこのまま帰して良いのだろうか……色々と考えを張り巡らせるうち、俺の中で彼女を今すぐ追い返す事に対する、罪悪感のよ

うなものが芽生え始めたのだった。

そんな事を思っているうち、不意に周囲の木々がざわざわと蠢きだした。

夜風とは違う、生温い風。

何か異様な気配が辺りを包み込んでいるという感覚は、素人の俺でもすぐに理解できた。

「何だ、あれ！？ 何か近づいてくるぞ！？」

辺りを見回していた俺は、ちょうど木々の奥に、大きな黒い影が見え隠れしている事に気づいた。

ガラガラと言う車輪が回るような音が聞こえていて、その音が明確になるにつれて影の大きさも次第に増していく。

「ば、馬車！？」

やがてその影は、俺たちの目の前でその姿を露わにした。

それは何と、甲冑をつけた二頭のユニコーンに引かれる、煌びやかな宝石によって装飾された木枠の『馬車』だったのだ。

外国ならまだしも、この現代日本にはおおよそ不釣り合いな、古めかしくも豪華絢爛な洋風の馬車である。

「さあ、姫。お迎えが参りましたよ」

ユリカが、カデイルに搭乗するよう促す。

どうやらこれが、カデイルの『迎え』らしい。

かなり迅速な対応である。

「もう二度とこのような悪戯はなさらぬよう、私の口からも本国に強く申し上げておきます。よろしいですね？」

「……わ、わかったよ」

強めの口調でユリカに叱られ、カデイルは抵抗せぬまま俯き、しよんぼりとしている。

やがてカデイルが近づくと、その馬車は扉を独りでに開け、中から赤い絨毯の敷かれた階段を伸ばしてきた。

アナログチックな外見に反して全て自動なのが気味悪いが、カデイマはそれを気に留める事もなく、トボトボとそこへ向かっていた

のだった。

「カデイル……」

両肩を落とし、絶望極まりない背中をこちらに向けるカデイルに、俺はどう声をかけたら良いかわからなかった。

「ヒビキ君……色々とゴメンね。お姉ちゃんと、いつまでもお幸せに」

一方のカデイルは寂しげな目つきのまま、無理矢理に口元を笑わせて非礼を詫びてきた。

そうして、暗い足取りで階段を登り始めたのである。

そんな彼女の様子を眺めるうち、俺はまたも悶々とした気持ちに苛まれていた。

確かに一連の事件は、あの少女が引き起こした事だ。

でも……本当にあいつ一人の責任か？

元を正せば、そもその約束を守らなかった家臣たちにも非はあるじゃないか。

確かに我が身を顧みず「ライブに行きたい」なんて言う曖昧模^{あいまいもこ}糊な希望は、興味の無い者にとってはどうでも良い事かもしれない。

だが、ただでさえ自由のない生活を強いられてきたカデイルにとって、それは何物にも代え難い唯一の希望だったのだ。

だからこそ、あいつは試験を頑張った。そして周囲の予想を裏切り、満点まで勝ち取ったというのに。

こんなの絶対、おかし過ぎる！

「おいカデイル、ちよつと待て！」

「？」

気がつく俺は、考えるよりも先にカデイルを呼び止めてしまっていた。

不意の発言に、馬車を引いていた二頭のユニコーンが鋭い眼光を光らせてくる。

まるで「部外者は黙っている」とでも言わんばかりの迫力だ。

だが俺は、怯むことなくカデイルを呼び止め続けた。

そしてユニコーンたちと同じようにこちらに視線を向けていたユリカに向かって、言った。

「ユリカ、あいつを連れ帰るのを少しだけ待ってくれないか」

「!？」

カデイルが、びつくりした表情を向ける。

ユリカもまた、驚いた様子で俺に怒り始めた。

「なっ、何を言い出すのですか！ 姫はカデイマ皇女とは違って、あちらの世界に帰らねばならないお方。これは私たちの国家の問題なのです！」

彼女の反対は、至極当然だった。

だが、そうだとわかっていても、俺は懇願する事を止めなかった。例え無駄だとわかっていても、今はカデイルを行かせるワケにはいなかったのである。

「わかつてる！ お前たちの事情だって事はわかつてるんだが……

頼む、この通りだ！」

「烏丸響……」

毎度の事ながら、なぜ俺は事件が解決する直前になって、それを引き延ばしてしまうような行動に走るのか、理解に苦しんでしまう。でもそこまでわかっていながら、やっぱり意思に負けて首を突っ込んでしまうのだから、筋金入りだと思って諦めるしかないのだろうが。

兎にも角にも、今の俺はひたすらユリカに頭を下げ、カデイルをここに留まらせる気持ちで一杯だった。

結局、その後三十分も粘った事が功を奏し、ユリカは渋々俺の希望を受け入れた。

そしてカデイルの送還を、しばらくの間延期してくれたのだった――。

3 . 私王子さま

向こうの世界に帰るはずだったカディルを連れ、自宅に戻った俺たち。

待っていたのは、いつの間にか目を覚まし、居間で独り慌てふためくカディマの姿だった。

エネルギー切れにも関わらず、数時間どころか一時間もしないうちに目を覚ましてしまったという、その驚異的な覚醒能力にさしものユリカも驚いていたが、兎にも角にもカディルは晴れて姉との再会を果たしたのである。

無論、カディルにとっては姉に逢う事が第一目的ではなかったし、カディマ本人にとっても、気がつくと消えていた俺たちが突然、この世界にはいないはずの妹を引き連れて戻って来たワケだから、その混乱ぶりと言ったら筆舌に尽くしがたいものであったが。

「あゝ！ やっぱサイコー！ 行って良かった」

カディルがこの世界に来てから二週間の月日が過ぎた、ある日。

満天の夜空の下、俺は彼女と共にオレンジ色の街灯に照らされる夜道を歩いていた。

俺のすぐ横を歩きながら、レース調のチュニックスーツにダメージデニムのパンツという『普通の』服装に身を包むカディルは、たいそう満足げな様子で、思い切り背伸びなど始めている。

二人で何をしてたのかって？

実はたった今、IG RASHIのライブに行ってきたのだ。

二週間前、故郷に帰ろうとするカディルを引き止めた俺は、ユリカに「一度で良いから彼女をライブに連れて行ってやりたい」と懇願した。

そして渋るユリカを説き伏せて滞在延期に成功した後、すぐさま自宅に戻り、ネットやら新聞やらの情報欄を読み漁ったのである。

だが、さすがは日本で有数の人気アイドルグループ。

チケットなどの店でも売り切れで、一枚たりとも入手する事はできなかった。

やはり遅すぎたか……などと諦めかけた俺だったが、意外な所で解決の糸口が見つかる。

何とクラスメートの詩音が、I G A R A S H I のファンクラブに入っていたのだ。

しかも彼女の手元には、友達が行けなくなったために余った、二枚のチケットが残されていたのである。

俺は勢い余って詩音に抱きついてしまうほど狂喜し、意気揚々とそれをカデイルに渡したのだった。

もちろん一人で行かせなどしたら、テンションが上がり過ぎて何をしでかすかわからない。

万一の事態を考えた俺はユリカを『保護者』として同伴させようとしたのだが、それを聞いたカデイルが「それならヒビキ君と行く！」と騒ぎ出したため、止むなく承諾したのである。

「やっぱり生で見る結城くんは、可愛かったね〜」

念願のライブを見られて、よほど満足したのだろう。

会場を後にし、こうして家路に着いている間も、カデイルは興奮覚めやらぬ様子で一心に感激の言葉を口にしていた。

因みに彼女の言う『結城くん』というのは、I G A R A S H I のメンバーである結城蓮^{ゆうきれん}の事で、男装も女装も完璧という不可思議な少年だ。

同性の俺にとって、ステージで見た時は「小学生にしては歌も踊りも上手い」程度にしか思わなかったのだが、狐耳を頭につけ、ミニスカートを履くというファンサービスが始まった時には、不覚にもドキリとさせられてしまった。

そんじょそこらの女の子など蹴散らしてしまうほどのエクストリーム・キュートぶりに、危うく彼のブロマイドを購入しそうになったほどである。

「お、さっそく迎えが来てるね」

そんな他愛もない会話に華を咲かせながら歩いているうち、やがて我が家が見えてきた。

家の前には、カディマとユリカ、そしてスタルニーが出迎えていて、彼女たちのすぐ傍に何やら車のようなものが停まっている。

二週間前、異世界からカディルを迎えに来た、あの豪華絢爛の馬車であつた。

どうやら、今日で本当に彼女とお別れする時がやって来たようだが俺にはもう、前回のような心の痞えは感じられない。

なぜならこの時のカディルの顔は、一面爽やかな笑みで埋め尽くされていたのだから。

「ヒビキ君。本当に感謝してる。おかげであたし、もう何も思い残す事はないわ」

そう言つて、カディルは軽やかだった足取りをピタリと止めたかと思うと、少し後ろを歩いてた俺に身体を向けた。

そして駆け足で近寄り、その勢いを保ったまま抱きついてきたのである。

「こ、こら！ 抱きつくなんて！」

夜な夜な住宅街の一本道で、突然何をしでかすのか。

真正面から堂々と覆いかぶさってきたカディルの身体を、俺は慌てて離そうともがいた。

もちろん、彼女は離れる事などせず、抱きつきの体勢を維持したまま、器用にそれを交わしていく。

「大丈夫大丈夫。この距離ならお姉ちゃんたちにも見えてないよ！」

「そ、そういう問題じゃなくて……って、あつ！」

まるで離れようとしないうちにカディルを何とか引き剥がそうと四苦八苦していた俺は、思わず硬直してしまつた。

彼女はあちこちに逃げ回っていたかと思うと、一瞬の隙を突いてこちらに顔を近づけ、頬にキスをしてきたのである。

初めて出逢つた時のあの掃除機のようなキスとは違う、唇で触れただけのソフトなものだったが、何とも言えない初々しさを感じさ

せた。

「ちょ、こらカディル！」

本当にこいつはカディマに似て、何をしでかすかわからない女である。

顔を真つ赤にし、俺はカディルの身体をようやく分離した。

ちよつと語気を強めて怒ってなどしてみるが、本人に悪びれた様子を感じられない。

「うゝん。それにしても惜しかったなあ。もう少し早く出逢ってたら、お姉ちゃんよりも先にキミをゲットしてたのに……」

パチンと指を鳴らして、今度は何やら独り事を言い始めたカディル。

「え？ 何だつて？」

その言葉を上手く聞き取れなかった俺は、もう一度聞き返した。だがカディルは「うゝん。何でもない」と言い残し、逃げるようにして走り去ってしまったのである。

そしてさつさとカディマたちの所へ向かっていき、「じゃ、元気で！」とだけ言つて、さつさと馬車に乗りこんでしまったのだ。

さんざん迷惑をかけておきながら、ずいぶんと素っ気ない別れ方である。

やがてカディルを乗せた馬車は独りでに扉が閉まり、階段を折り畳み始めた。

ボタンという鈍い音がして、それを合図にユニコーンたちが蹄を鳴らし始める。

パカパカという、アスファルトを叩く音は次第に早くなっていき、俺からどんどん遠ざかっていった。

そこから次第にスピードを上げていったかと思うと、滑走路から飛び立つ飛行機のように、フワリと宙に浮き始めたのだ。

無限の星々が待つ空へ向かって、高く、高く。

雲ひとつない、満天の星空に向かって浮かび上がっていくその様は、まるでメルヘンの世界を見ているようだった。

しかし、すでに豆粒ほどの大きさに飛び去っていた馬車を、呼び止める事など不可能だった。

ユリカに懇願してまで奔走した俺の二週間を返せ！

激しく心の中で叫びながら、俺はただただ夜空に身体を向けて、呆然と立ち尽くしていたのだった――。

エピローグ

「あゝ生き返る……」

冬の寒さも一層の強さを増し、辛うじて葉を身に纏っていた木々も、今ではすっかり枯れ果てている。

家の窓ガラスも夜になるとすっかり凍りつき、一面を氷の化粧に彩られているのだ。

恐らく南国人には到底理解できないであろう、北国の刺すような寒さ。

当然、家に帰ればストーブの前に居座って寝そべるのが一番の楽しみだったりするのだが、最近はそれもすっかり適わなくなってしまった。

今や俺の家にはカディマに加えて、ユリカとスタルニーまでもが居候をしているのである。

周知の通り、二人はホームレスだから、名目上は「寒さが落ち着くまでの一時的な避難」という形になっているのだが、なぜかすっかりこの家の主人として適応してしまったようで、掃除・洗濯・調理から買い出しまで何でもこなすようになった。

それはそれでありがたいのだが、おかげで俺のライフスタイルは彼女たちによつてすっかり骨抜きにされ、もはやどちらが居候なのかわからない状況になってしまったのだ。

唯一、自由にできる時間帯と言えば、トイレに入っている時が、今こうして風呂に入っている時のみ。

もちろん風呂だっていつまでも入っていて良いワケではないし、
いつどこでカディマが『混浴』という名の奇襲を仕掛けてくるかわ
からないから、気を抜く事など到底適わないが。

「ったく、『入浴時間は着替えも含めて二十七分間以内』って何だ
よ……頭と身体洗って終わりじゃないか」

ユリカによって完璧に磨き上げられた湯船に浸かりながら、これ
また隅々までシミ一つない天井を見上げ、独り言を呟く。

彼女たちと出逢ってからというもの、一度として気の休まる日は
無くなった。

カディマ一人と居るだけでもハラハラドキドキに支配される毎日
だったと言うのに、今度はそれにユリカとスタルニーと言う、『似
た者連中』が追加されたのだ。

浴室だろうとどこだろうと、構わず乱入してくるカディマにも困
ってしまうが、逆にあの二人はガードが堅く、着替え中の鉢合わせ
も許されない。

下着姿でも目の当たりにしようものなら、即座に『お仕置き鉄拳』
三百五十発が飛んでくる。

しかしここはあくまでもごく一般的な四人家族が暮らす程度の広
さの家。

人数上は許容範囲だとしても、思春期真っ盛りの十代の男女が、
一対三の比率で暮らせるようには設計されていない。

ほぼ全ての部屋と備品が共有なのだから、一日に必ず一度はそう
いった思いがけない場面に直面するワケで。

「おっと、いけねえ！ もう時間だ！」

そんな事を悶々と考えるうち、制限時間を知らせる防水性のスト
ップウォッチがけたたましく鳴り響いた。

五分前になると警告を発するようにセットしてあるのだ。

自分の家なのに、何とも涙ぐましい振る舞いである。

「ホントに、軍隊の山ごもりじゃあるまいし。よいしょ……ん？
あれ？」

湯船の縁を掴み、寄り掛かっていた上体を渋々と起こす。

すると俺は、ちょうど目の前に張られていた入浴剤入りの真っ白な水面に、ポコポコとした泡立ちが生じている事に気づいた。

言っておくが、腸内のメタンガスを放出したワケではない。

「？ 何だ！？ お湯が……」

浮きあがってくる泡に気を奪われているうち、水面がユラユラと揺らぎ始めた。

それは次第に勢いを増し、やがて浴槽から溢れ出るほどの大きさへと変わっていく。

浴室全体が揺れているワケではない所を見ると、地震の類ではないらしい。

自分は大して動いていないはずなのに、別の何かが暴れ回っているのだ。

あまりに狭い空間の、あまりに至近距離で起きている出来事に、俺の脳裏には『脱出する』という最も基本的かつ効果的な危機回避行動すら、選択肢から消え去っていた。

今度は何だ？

もう唯一の息抜き場所だった風呂場にすら、安寧を求める事ができなくなったのか？

そんな諦めにも似た感情が先に出てしまふという愚かさを必死に押し殺しながら、俺はザバザバと生き物のように暴れ続ける水面を眺め続けていたのだが。

「！！ のわああああ！！」

激しさを増す泡と波に彩られた水面が、突如として盛り上がり始めた。

直後、水面を突き破るかのようにザバーっと大量の水しぶきが上がり、構えていた俺の視界を埋め尽くす。

浴室中に撒き散らされる水しぶきを両腕で防ぎながら、奇声にも似た叫び声を上げていた俺は、目の前に何者かが立ちはだかっている事に気づいた。

何とそれは、ついこの前別れたばかりの、あのお転婆少女だったのである――。

「ぶはあゝ苦しかったあ!」

「カ、カデイル!? カデイルじゃないか!」

ずっと潜り続けていたのだろうか。

カデイルはお湯の中から顔を突き出した途端、深呼吸をするように思い切り息を吸い込んでいた。

驚いた事に、服はおろか下着すらも一切身につけておらず、正真正銘の裸体。

首から上の圧倒的な美顔と高度にバランスを保つ、抜群のプロポーション。

姉・カディマと双璧を成していると言っても過言ではないが、このカデイルに至っては更に引き締まった脇から腰にかけてのくびれが見る者の視線を奪って離さない。

元々がボーイッシュな顔立ちという事もあり、正にアクティブな美少女と呼ぶに相応しいルックスを誇っていたのだ。

「お前、どうしてこんな所にいるんだよ!？」

あんな壮大な別れ方をしておきながら、たったの十数日で舞い戻ってくるとは。

「戻ってくるかもしれない」と意味深な発言をしていたのは確かだが、いくら何でも早すぎだろう。

俺は止め処なく押し寄せてくるやるせなさに、完全に心を支配されていたのだった。

「どうして? 決まってるじゃん。キミに逢いに来たんだよ」

カデイルはさも当然そうにそう言って、驚きの余り浴槽の中で引っくり返っていた俺にいきなり「ダ〜リン!」などと言って抱きついてきた。

何度も言うが、彼女は上下共に何の衣類も身につけていない裸である。

「バ、バカ! そんな格好で抱きつくなんて、お前ええええ!」

俺の身体に、カデイルの流線形のボディがこれでもかと押し付けられる。

張りのある柔らかな肌に入浴剤のツルツルとしたコーティングがプラスされた、何とも滑らかで艶めかしい肌が、ピッタリと余すことなく密着していた。

恐らく数あるドタバタハプニングの中でも、間違いなく五本に指には入るであろう、衝撃的かつ興奮度最高潮のワンシーンである。

「烏丸響、何かあったのですか？」

ちょうど、その時。

こちらに異変に気付いたのか、脱衣所からユリカの声がして、ドアのノブがガチャガチャと回り出した。

そして俺が止める間もなく、ボタンという音と共に勢い良く扉が開かれたのだ。

「騒がしいですね。一体どうし……」

典型的な気まずい鉢合わせだった。

裸のカデイルと抱き合う俺の姿を見て、ユリカは無表情ながらも硬直し、額中から汗を流していていたのだ。

さしもの彼女も、この格好には冷静でいらなかったようである。

「何じゃ？ 何事じゃ？」

「ちよつと、何かあったの？」

ユリカに続き、今度はスタルニーとカディマたちも浴室の方へ入ってくる。

もちろん、彼女たちもまた、メドウーサと目が合ったかのようにその場に化石してしまった。

それはそうだ。

色々とドタバタしてきたハプニングの中でも実際に男女が裸で抱き合うというストレートな光景というのは、前代未聞であり前人未到の領域。

「とうとうここまで来てしまったか」と言わんばかりの、三人の引き攣った表情が痛過ぎる。

「カ、カディル姫、なぜここへ？ まさかまた……」

何とか気を取り直し、裸で抱き合う事よりも重要な事実指摘を始めたのは、ユリカだった。

彼女の話では、カディルはカディマのような普通の王族以上に抑圧的な生活を強いられていて、外の世界になど出る事はほぼ不可能な環境に置かれていたはず。

にも関わらず、彼女はこうして俺たちの前の前にいる。

と言う事は……もしやまた脱走してきたというのか？

「違う違う。今回は脱走なんかしてないよ。ヒビキ君に逢いに来たのは間違いないけど」

周囲の疑念に対し、首を振るカディル。

ずいぶんと軽々しい口調であるが、それでは一体、どうやってここへ来たというのか。

「え？ だってあたし、土・日はいつも休みだもん」

「……は？」

カディルの何気ない発言。

彼女以外の四人が、一斉に声を裏返した。

「だから、あたしが在籍してる『インベリアル・クアンタム・アカデミア帝立量子研究院』は完全週休二日制なんだってば。普段は密室生活だけど、許可さえもらえば自由に外出しても良いって決まりになってるんだよ？」

週休二日制など、何やらこの国ではやけに聞き慣れた言葉である。ユリカから聞いていた話とずいぶん違うようだが、最も驚いたのは他ならぬ本人だったようで、「あれ？ 言ってなかったっけ？」などと首を傾げているのだ。

「そんなバカな……！？ あそこは全次元はおろか、他の王族すらも入る事のできない完全な閉鎖空間のはず。被検体として招かれた後の数年間は、一步も外に出られない牢獄のような場所だったはずでは？」

語気を強め、ユリカは納得いかない様子で、反論を始めた。

しかし当のカディルもまた首を振る一方で、ユリカの質問を真っ

向から否定するのだ。

「ユリカさあ、それは純粹に二千年前の話でしょ？ 異次元に昇華してから色々とルールが変わったんだよ。例えば国が決めた事でも、何年も同じ場所で同じ事をするのはイヤだって、皆逃げ出しちゃった時期があつたから。それで、とうとうお偉いさんたちが折れたワケ。学校だろうと研究所だろうとたまには遊びたいし、出逢いだつて欲しいじゃん？ 一応、私たちだって人間なんだもん」

今時の若者らしい、意外なほど淡々とした理屈を羅列し、カディルは悪びれた様子もなくニコリと笑みを浮かべた。

そしてなぜか「ね？ ヒビキ君」などと言って細目を作りながら、俺の方へと同意を求める視線を向けてくる。

何やら生々しいというか、ずいぶん世俗的な話題になってきたが、どうもユリカの言っていた話は、ずいぶんと古い頃の話だったらしい。

「そ、そうでしたか……私とした事が。カディマ皇女の追跡に必死になっていた間に、目まぐるしく変わる非物質界の風土から取り残されていたようです……」

そう言つて、ガツクリと膝を崩すユリカ。

情報屋としての自負もあるさしもの彼女でも、知り得ない事があつたとは。

俺にとつてはある意味、そちらの方が驚きである。

「ちよつと待て。じゃあ何だ？ この前、カディルがこつちの世界に逃げ出して来た理由つてのは……」

次第に真実が明らかになっていくうち、俺の心の中である一つの疑念が浮かび上がつて来た。

そもそのカディルとの出逢いのきっかけである。

当時のユリカの推測では、カディルはがんじがらめの生活を強いられていた事で外界への憧れが強くなり、脱走に至つたと言つ事になつていた。

しかし『がんじがらめの生活』という要素自体が解消した今、カ

デイルの来訪目的に今一度の再検討が呼び起こされたワケである。

「ん〜っと……その、まあ……」

その話題に話が及んだ途端、言葉に詰まり始めるカディル。

何やら言いにくい様子であるようだが、照れ笑いを浮かべながら誤魔化そうとしている辺り、間違いなく逼迫的な理由ではないという事は、誰の目にも明らかだった。

薄々感づいてはいたが、俺は意を決して本題を切り出してみた。

「お前……もしかして、純粹にI G A R A S Hが見たかったっていうだけの理由で、逃げ出してきたんじゃないだろうな？」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ダ~~~~~~~~リン！ 大好きだよ~~~~~！」

どうやら俺の推測は完全的中したらしい。

それまで気まずそうに視線をあちこちに逸らしていたカディルは、無理矢理に閑話休題を迫るかのように、再び俺の方に抱きついてきたのだ。

「やつぱりか！ てめえ、ただのサボりでこっちに来やがったんだな……！」

裸で抱きつかれた事に慌てふためきながらも、カディルを叱りつける俺。

何の事は無い。

今回のドタバタ劇は、単にカディルというお転婆姫の、我がままで引き起こされた出来事だった。

ただ単に「アーティストのライブに行きたい」という願望を持っていた少女が、軍事兵器並みの力を持っていたために、カディマは眠らされ、ホームレスの人々は住み家を失ってしまったのだ。

やってる事は同じでも、そこに『長年抑圧され続けた苦しみ』という前提が入るのと入らないのでは、その重みに格段の差がつい

てしまう。

「お前！ あんな思わせぶりな別れ方した挙句、『もう何も思い残す事はない』なんて意味深な事言いやがって！ てつきりユリカの言う通り、どっかに閉じ込められた生活をしてたと思ったじゃないか！」

二週間もの間、チケツト探しに奔走した俺の貴重な時間を返せ！俺は心の底から湧きおこってくるこの上ない怒りと虚しさで、一杯だった。

「それはヒビキ君が勝手にそう思い込んだだけでしょ？ でも、あの時はあの時ですつごく嬉しかったんだよ。あんなに優しくしてくれるなんて思わなかったんだもん……おかげで帰ってからもずつとドキドキしてて、それでこうしてまた逢いにきたんだから！ 夜は眠る事もできないし、どうするの？ みーんなヒビキ君のせいだよ！ キミに責任取ってもらうからね！」

カディルはカディルで完全に開き直ってしまった様子。機関銃のように、それっぽい理屈でまくし立て、見事な責任転嫁カウンターを喰らわせてくる。

こうした泥仕合になると、女には敵わない。俺たちのやり取りを眺めながら、ユリカとスタルニーも呆れるばかり。

「……バカみたい。勝手にすれば」

「……もう私の手助けできる範疇ではありませんね」

そう言って「もう勝手にしろ」と言わんばかりに、さつさと居間の方へと戻って行ってしまったのだ。

だがこんな中でも一人、納得できないヤツがいた。そう。カディマである。

「うむむむ……カディル！ お主、いい加減にせんか！」

ワナワナと全身を震わせ、妹のカディルに警告を発する。

「カディマ！？ 助けてくれるのか？」

やはりこういう時こそ姉だ。

一見、頼もしそうに感じられたカディマに、俺は羨望の眼差しを向けていたのだが。

「もう我慢ならぬ！ わらわも一緒に入るぞ！」

「はああ！？」

翻弄される余り、一瞬でもカディマに期待を抱いたのが運の尽き。カディルの姿に触発されるように、カディマもまた来ていた服を全て脱ぎ去り、ズカズカと浴槽の中に割り込んできたのだ。

彼女とて、その顔とスタイルの良さは周知の通り。

抜群過ぎるルックスを持つ姉妹が、要所も隠さない状態で一人用の浴槽に居座っているのである。

三人の身体があちこちで密着し、もう何か熱気だけでは済まされない色々な『反則レベルの色欲的雰囲気』が、辺り一面を包み込んでいた。

「あゝ！ お姉ちゃん、あたしとヒビキ君の恋路を邪魔する気！？」

「うつさい、恋路に姉も妹もないじゃ！ にしてもヒビキ！ お主、わらわとは一度の風呂に入ってくれなかったというのに、どうしてカディルとは一緒に入るんじゃ！」

カディルに次いでカディマにも言い寄られ、俺はもう心身共に窒息しそうだった。

「アホか！ 俺が誘ったワケじゃない事くらいわかるだろ！ おいこらユリカたち、助けるオオオオ！」

どうでも良いクライマックスという意味では期待通りの最期だが、これって大団円とはちょっと違う気がする。

兎にも角にも、この日の俺たちはいつまでも浴室の中で口論を続け、解決の糸口を見い出せないまま数時間も言い合っていたのだ——。

（おしまい）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1969z/>

異世界のドタバタ・プリンセス / ふぁ～すと・こんぷり～と！

2011年12月7日02時00分発行